第II章　調査方法と調査の経過

第１節　調査の方法（付図参照のこと）

1　調査区の設定

調査区域設定にあたっては、平成４年度に行われた試掘調査での設定に従った。すなわち、道路建設用中心杭NO.315を基準点（Ｋ－５）としNO.315とNO.339を結ぶ南北方向の基準線をＫライン、幅杭NO.315でこれに直交する東西方向の基準線を５ラインとして４ｍ四方のグリッドを設定した。各グリッド杭の呼称は、中心杭NO.315（Ｋ－５）を起点として、北へ６～108と算用数字を付し、また西へＬ～Ｐ、東へＪ～Ｅの順にアルファベット文字を付して、アルファベットと算用数字との組合せで示した。具体的にはそのグリッドの南東隅の基準杭の表示とした。なお、長軸方向は、Ｎ－８°－Ｗである。

基準標高（Ｂ．Ｍ.）は、調査区域外に設けられていた工事用測量杭（Ｋ．Ｂ．Ｍ.）から引用し、調査区域内の任意の場所に必要に応じて設定した。

2　発掘調査の方法

調査にあたっては、土層の堆積状況を観察するためのセクションベルト及び深掘りトレンチを適宜設け、グリッドごとに掘り進めていった。

遺物の取り上げは、グリッド単位に層位ごとに行い、必要に応じて平面図を作成し、レベルを記録することにした。

遺構の調査は、原則として二分法・四分法で行い、土層を観察しながら精査を進めた。崩壊の危険性のある遺構は土層観察用のベルトを設けないものもある。遺構内の出土遺物のうち時代決定のできる遺物については平面図を作成し、レベルを記録したが、それ以外の遺物は一括で取り上げた。

遺構の実測は、遣り方と平板測量で行ったが、リフティングケーブルカメラおよびラジコンヘリによる空中撮影も並行して行った。遺構の実測の縮尺は、主として20分の１を基本とし、住居跡のかまど等については10分の１とした。遺構の番号は、種類毎ごとに確認順に付することとした。

土層の名称は、基本層序については、表土から下位にローマ数字を、遺構内堆積土については上位から下位に算用数字を各々付すことにした。土層観察にあたっては、『標準土色帖』を用い注記した

写真撮影は、適宜行うこととし、主としてカラーリバーサル及びモノクロームの２種類のフィルムを用いた。但し、遺構や遺物の状況等に応じてカラープリントやインスタントカメラも適宜使用した。

第２節　調査の経過

平成５年４月13日に発掘作業員の雇用説明会を実施し、14日には仮設建物（プレハブ）を４棟設置した。４月18日には発掘機材を搬入し、調査区域内の環境整備やグリッド設定、測量原点（Ｂ．Ｍ．）の移動、粗掘作業等を開始し、発掘調査に着手した。粗掘作業は、０－107区から着手し、重機を投入しながら徐々に粗掘範囲を拡大していった。調査が進むとともに、土師器や須恵器が出土し、竪穴

住居跡や溝跡４軒、溝跡等の遺構が検出され始めた。なお、排土の搬出の関係上、Ｈラインより西側の作業に努めた。後日、西側の精査がすべて完了した時点でＨラインより東側の調査を行うこととした。工事関係者との協議の結果、以後、排土搬出のために排土搬出路の西側と東側を時期をずらして行うこととした。

５月16日には、浪岡町内５遺跡発掘調査打合せ合同会議を浪岡町立中央公民館において開催した。会議では本事業の概要及び発掘調査要項の説明と調査方法等について協議し、共通理解を図った。会議終了後に調査現場を踏査して、今後の調査のあり方等について確認した。

６月上旬には、粗掘面積6,000㎡を終了し、精査が進むにつれ、縄文時代の溝状ピット２基、平安時代の竪穴住居跡10軒、掘立柱建物跡７棟、土坑32基、溝跡52条が続々と検出され、特に溝跡の精査に時間を要した。竪穴住居跡は、上部が削平されていて、遺存状態は良くない。

同月中には、排土搬出用の通路80ｍをＫラインに敷設し、精査終了部分のラジコンヘリによる遺構平面図作成のための空中撮影を終了した。

８月上旬、粗掘面積11,250㎡を終了した。その時点で、検出された遺構は、住居跡19軒、掘立柱建物跡18棟、土坑45基、溝跡106条で、出土遺物量は、平安時代の土師器や須恵器を中心に段ボール箱にして約15箱分である。

８月下旬、調査の進渉状況が良好なために、調査期間内に当初の調査予定面積14,850㎡を終了し、本遺跡調査対象面積19,800㎡を終了できる見込みとなった。そのため、９月中旬までに、関係機関と協議した結果、調査対象面積19,800㎡を目標として、今後の調査を続行するとの結論に達した。

９月中には、排土搬出用の通路を300ｍまで延長し、第２回目の精査終了部分のラジコンヘリによる遺構平面図作成のための空中撮影を終了した。

９月下旬までに15,000㎡の調査が終了した。検出された遺構数は、竪穴住居跡22軒、掘立柱建物跡20棟、土坑62基、溝跡116条、井戸跡２基となった。

10月上旬、Ｅ～Ｋ－７～17付近に環濠が確認され、その内側の地区には多数の遺構が激しく重複してあることが判明した。同時に、Ｌ～Ｏ－15～20付近には、少なくとも５軒以上の竪穴住居跡があることもわかった。重機を投入して排土の移動を急ぐとともに、その部分の精査に全力を注いだ。

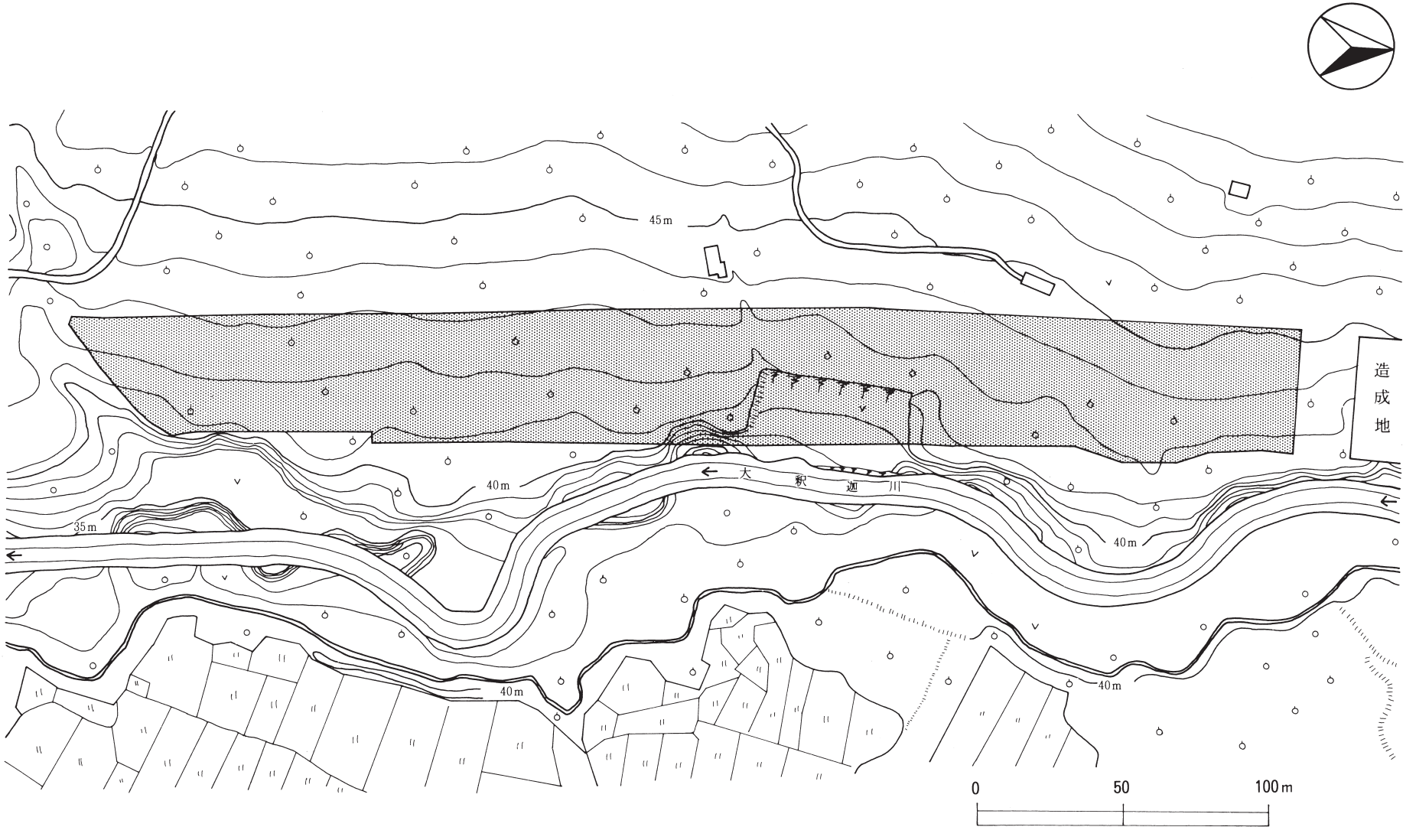
同月中旬より、段階的に当センター職員、調査補助員の応援を得て、精査を急ピッチで進めた。

11月５日には、浪岡町内の、高屋敷館、野尻(2)・(3)、野尻(4)、羽黒平(1)、平野の６遺跡合同の遺物展示会及び現地見学会を実施し、多くの町民が訪れた。

11月中旬、第３回目の精査終了部分のラジコンヘリによる遺構平面図作成のための空中撮影を実施する予定だったが、14日、不運にも、積雪30㎝の大雪となり、不可能となった。そのため、急遽、除雪や雪解け水の排水に努めるとともに、１週間の期間延長を決定した。空中撮影のためのマーキングを施し、遺構保護のために全面にブルーシートを覆った。

11月21日、ようやく第３回目の空中撮影が実施された。その後、環濠をはじめとして危険箇所の埋め戻しを行い、調査機材を搬出し、調査の全日程を無事終了した。

調査終了時の遺構数は、縄文時代の溝状ピット４基、平安時代の竪穴住居跡37軒、掘立柱建物跡33棟、土坑140基、溝195条、井戸跡１基である。遺物は、段ボール箱にして約80箱分出土した。



第II－1－1図　発掘調査区域及び周辺の地形

第Ⅲ章　遺跡の環境

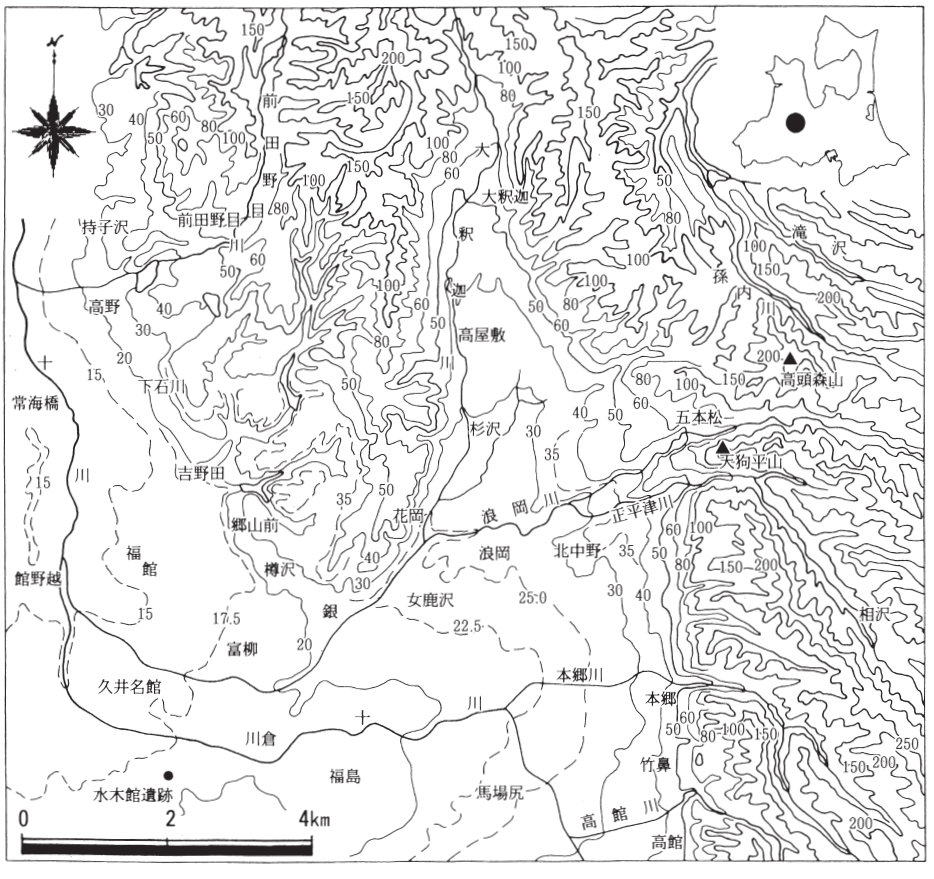
第１節　遺跡周辺の地形及び地質

青森県立板柳高等学校教諭　　山口　義伸

南郡浪岡町は津軽平野南東縁に位置し、大釈迦川・浪岡川などの流域に集落が点在する。

浪岡町を流れる主な河川として大釈迦川と浪岡川がある。大釈迦川は梵珠山（468m）を源とし梵珠山地及び前田野目台地の東縁をほぼ南流する。梵珠山地の分水嶺西方を南流する前田野目川は梵珠山の北側に位置する馬ノ神山（549m）を源とし、前田野目付近で平野部に達し平野内を北流する十川と合流する。一方、浪岡川は南方の火山性丘陵地を北西流して平野部に達し前田野目台地南端の女鹿沢付近にて大釈迦川と合流する。合流したのちに台地を迂回して板柳付近で十川と合流する。正平津川も火山性丘陵地に源を持ち、北西流して浪岡町五本松付近で浪岡川に最接近し浪岡城跡で合流する。浪岡川及び正平津川の丘陵地から平野部への出口付近には開析された扇状地性の地形が展開し、また両河川を流下した火砕流堆積物からなる台地も舌状に分布する。なお、浪岡城跡はその火砕流台地上に位置し、南端の崖下には浪岡川と正平津川の合流点を望むことができる。

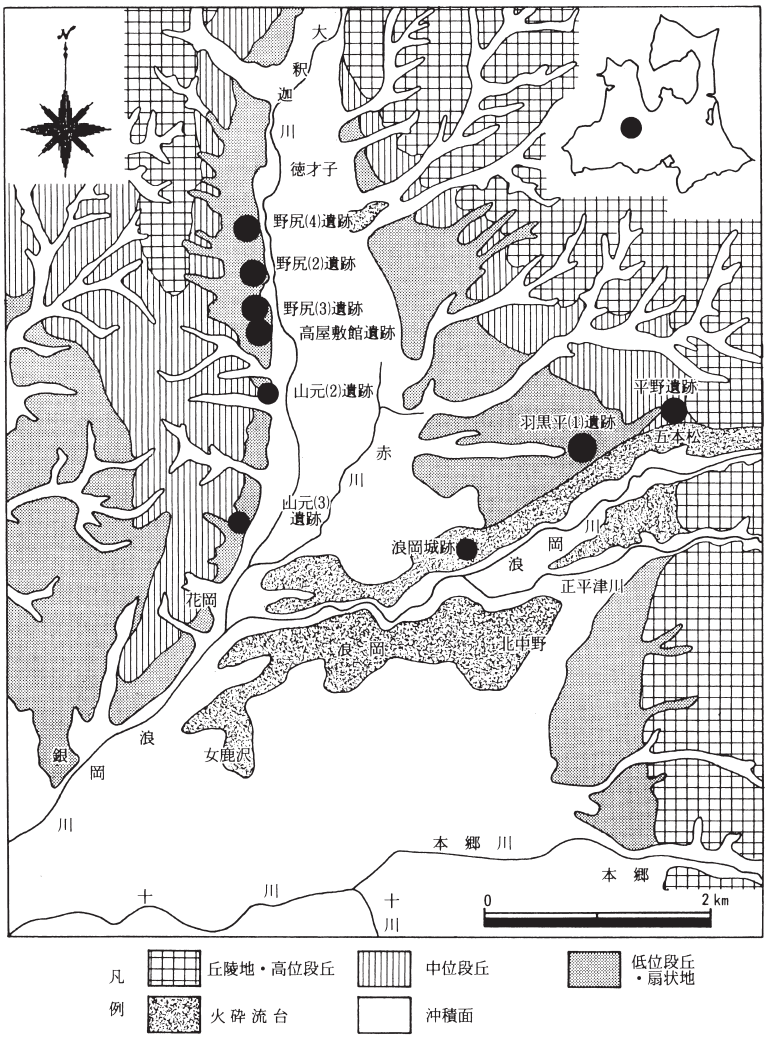
津軽山地南部の地形をみると、大釈迦川西方及び北方には馬ノ神山及び梵珠山を中心とする南北に



第Ⅲ－１－１図　浪岡周辺の等高線図

帯状の梵珠山地があり、外縁部には大釈迦丘陵が分布する。さらに、丘陵地の縁辺には前田野目台地が弧状に展開する。大釈迦丘陵は砂岩・シルト岩を主とする大釈迦層（新第三紀鮮新世～第四紀更新世）からなり、前田野目台地は八甲田第１期火砕流堆積物及び前田野目層からなる高位段丘、洞爺火山灰を指標とする中位段丘、そして縁辺部に分布する低位段丘の3段からなる。一方、大釈迦川東方及び南方には高頭森山、坊主畑山、高陣馬山、塚森山などの標高250m以下の山稜が点在するが、全体として北方へ緩傾斜する火山性の丘陵地が展開する。大釈迦層を基盤とし、これを不整合に覆う八甲田第１期火砕流堆積物（約65万年前の流下）及び八甲田第２期火砕流堆積物（約40万年前の流下）からなる。これらの火砕流堆積物は谷地形など凹地を埋積するように流下して平頂な丘陵地を形成する。

第Ⅲ－1－1図は浪岡周辺の等高線図を表す。大釈迦川と西方の前田野目川との間では、標高50～200mの等高線が南方に高度を下げながら舌状に張り出し、その稜線部は大釈迦川寄りにある。標高80m以高の等高線は開析谷による浸食で大きく入り組み起伏に富んでいることが把握できる。ただ、標高80～150mまでの等高線をみると頂部にやや平坦な面を認められるが、標高150m以高ではあまり認められない。なお、標高60m以下の等高線はなめらかで開析谷による影響もあまりなく起伏の少ないことが読み取れる。



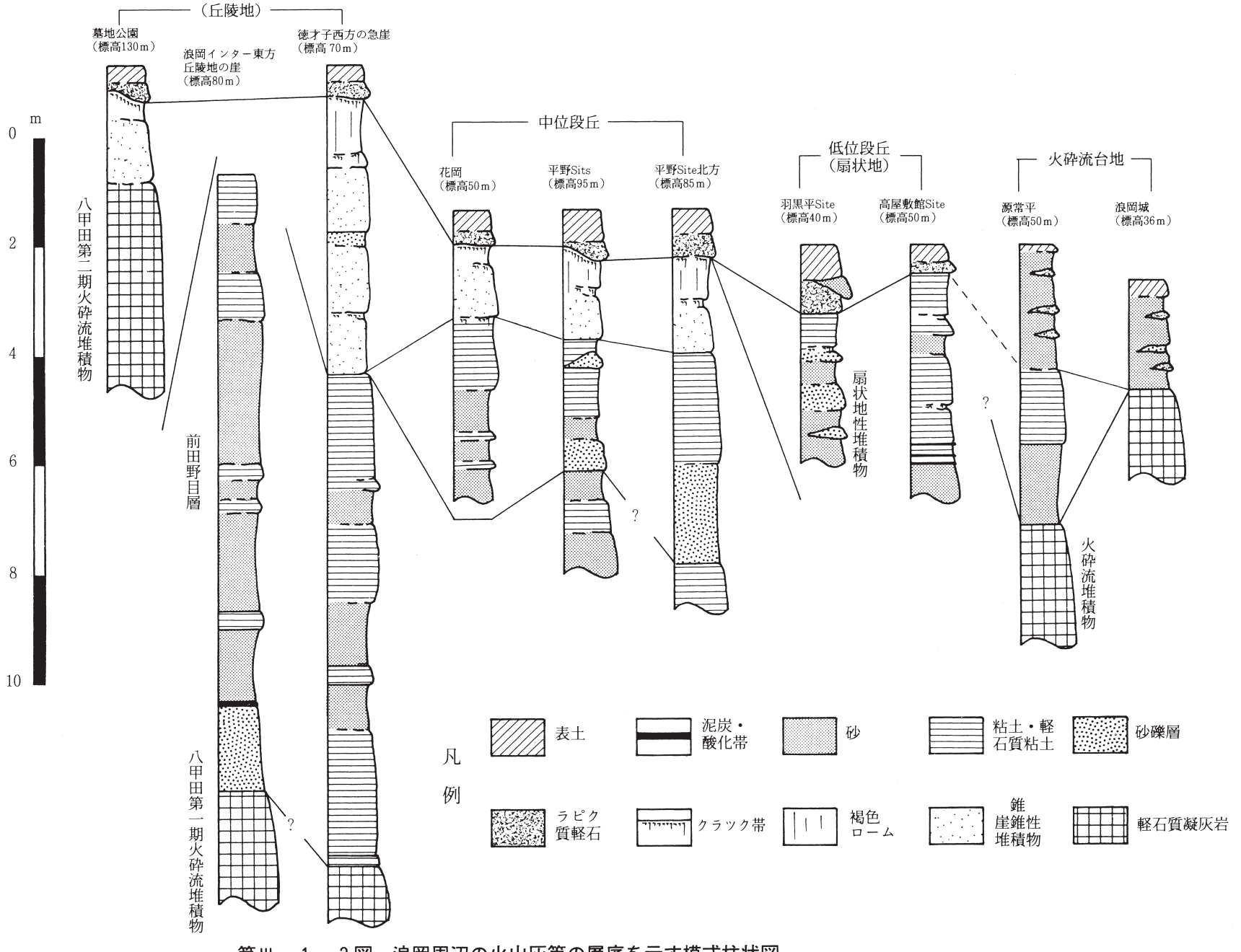
第Ⅲ－１－２図　浪岡周辺の地形分類図

一方、大釈迦川以東においては浪岡川及び正平津川を境に南北で地形発達がやや異なる。両河川より南側では、標高80m以高の等高線は開析谷の浸食により大きく入り組み、谷間丘陵としての地形が展開する。平野部に接する標高50～60mの等高線はほぼ南北に走って構造的な要素をもち、線上には本郷、竹鼻、高館、三島などの集落が点在する。本郷川あるいは高館川以北では標高30～50mの等高線が平野部に向かう傾斜面として展開し、浪岡川及び正平津川を中心とする扇状地の南半部に相当するものと考える。これに対して、両河川の北側では標高120～150mの等高線を境に等高線の粗密の度合い及び入り組みに変化が認められる。標高150m以高では等高線の間隔が密で入り組みが大きい。なお、標高120～150m付近の等高線の密集部は南北方向に走り、南側の本郷、竹鼻、高館などの集落が点在する標高50～60mの等高線のもつ方向性と一致する。この方向性は津軽平野南縁部を通る黒石断層（村岡…長谷，1990）の延長線を物語る。一方、標高100～120mの等高線では浸食による入り組みが大きいが頂部に平坦面が認められる。標高90～100mの等高線にあっては丘陵地縁辺の緩傾斜面として読み取ることができ、開析の進んだ小丘地として北西方の大釈迦川に向かって点在する。標高30～60mの等高線はほぼ等間隔に配置し、平野部に向かって緩傾斜する扇状地の北半部と考える。

第Ⅲ－１－２図は浪岡周辺の地形分類図を、第Ⅲ－１－３図はその構成層を模式柱状図で表す。これによると、大釈迦川以西では平野部に楔状に張り出す前田野目台地が特徴的である。この台地は３段の段丘からなる。砂及び粘土を主体とする前田野目層からなる高位段丘は北端において帯状の分布を示し丘陵化している。なお、図の北側には八甲田第１期火砕流堆積物からなる平頂な丘陵地も分布する。洞爺火山灰を指標とする中位段丘は南方に大きく舌状に張り出し頂部に平坦面をもつ。低位段丘へは西側が急傾斜面で、東側が急崖でもって接する。そして、低位段丘面は台地縁辺部に弧状に展開し、大釈迦川沿いではこの川への傾斜面として南北に帯状に分布する。平野部側では開析谷の影響でやや起伏するが全体的にみて平野部への緩傾斜面として分布する。ただ、段丘末端部は比高４～５m程の急傾斜面となっている。

一方、大釈迦川以東では浪岡川及び正平津川流域に展開する扇状地が特徴的である。浪岡町五本松付近を扇頂部として、北が大釈迦川沿いの徳才子、南が本郷あるいは竹鼻付近を扇端部とする弧状の分布を示す。大釈迦川、浪岡川及び正平津川によって浸食される。この開析扇状地は構成層から判断して大釈迦川以西に分布する低位段丘に相当すると考える。また、開析された扇状地内には流下した火砕流堆積物による舌状台地も分布する。浪岡城跡を含めて浪岡町の中心街はこの火砕流台地上に立地する。火砕流はおよそ23,000年前に十和田火山の噴火活動によるものと考える。なお、八甲田第２期火砕流堆積物などからなる火山性丘陵地の縁辺部には断片的に中位段丘がみられ平野遺跡が立地する。

本遺跡は浪岡町の北方3.0～3.5km地点にあって、大釈迦川西方の低位段丘面上に立地する。調査区域は標高38～42mの大釈迦川に臨む。段丘末端部にあって、大釈迦川には比高３～４m程の急崖で臨む。大釈迦川流域には、東方の扇状地との間に大釈迦川の氾濫による沖積上位面が南方に向かって帯状に分布する。大釈迦川西方に展開する低位段丘面は標高40～60mで南北に帯状に分布し、面の開析度が小さく平坦ではあるが東方に20～25m／500mとやや急傾斜する。本遺跡南方に立地する高屋敷館遺跡で確認したところでは、本遺跡の基本層序第Ⅴ層中に含まれる褐鉄鉱層が周氷河地帯にみられるインボリューションの要素をもち、さらに段丘面よりも大きく大釈迦川にむかって傾斜する。この事



第Ⅲ－１－３図　浪岡周辺の火山灰等の層序を示す模式柱状図

実から、大釈迦川が浪岡撓曲（活断層研究会、1991）の軸をなす構造谷で、西岸に発達する低位段丘面がその西翼に相当するものと思われる。なお、低位段丘の背後には中位段丘が分布し、比高約20mの急崖で接して崖下の低位段丘面には崖錐性の堆積物が厚く堆積する。低位段丘を開析する小谷が少なく、野尻（3）遺跡の調査区域で確認したように埋積された谷地形が多いことなどから、中位段丘からの流水が土砂とともに低位段丘面のほぼ全面を流路として流れ、かつ凹地を埋積して大釈迦川へと達したものと思われる。基本層序第Ⅰ層及び第Ⅱ層の粘土化した土壌の存在、さらには検出された住居跡の外周溝が大釈迦川に面したほうを開放する事実などから流水の影響があったことを物語る。

次に、本遺跡調査区域内における基本層序について記述する。調査区域は大釈迦川に平行して南北に細長いので調査区域毎の層序について記述する。模式柱状図は第Ⅲ－１－４図に示した。

次に、野尻（４）遺跡の基本層序は、Ｎ－45グリッドで検出した第１号井戸跡の側壁で確認した特徴をもとに記述する。本調査区域は標高38～40mであって、他の調査区域より高度が低く湿地性の環境であったと思われ、基本層序第Ⅲ層は水成堆積の特徴を示す。第Ⅲ層より上位の各層も粘土質であることから西方の丘陵化した中位段丘より流水が供給されていたものと思われる。なお、Ⅱ層中には遺構外においても苫小牧火山灰（B－Tm）が確認される。

Ⅰ　層　黒色土（厚さ10～20㎝）　耕作土である。粘土ブロックが多量に混入し全体的に粘土質である。かたさはあるが脆い。乾くと黒灰色に変色しクラックが目立つ。

Ⅱａ層　黒色腐植質土（厚さ約10㎝）　粘性・湿性がやや欠け、腐植質でソフトな感じである。乾くと格子状の細かな割れがみられる。混入物があまり目立たない。本層中部には白頭山起源の苫小牧火山灰（B－Tm）が認められ、この火山灰を含むレンズ状の薄層が黒灰色を呈して堆積する。

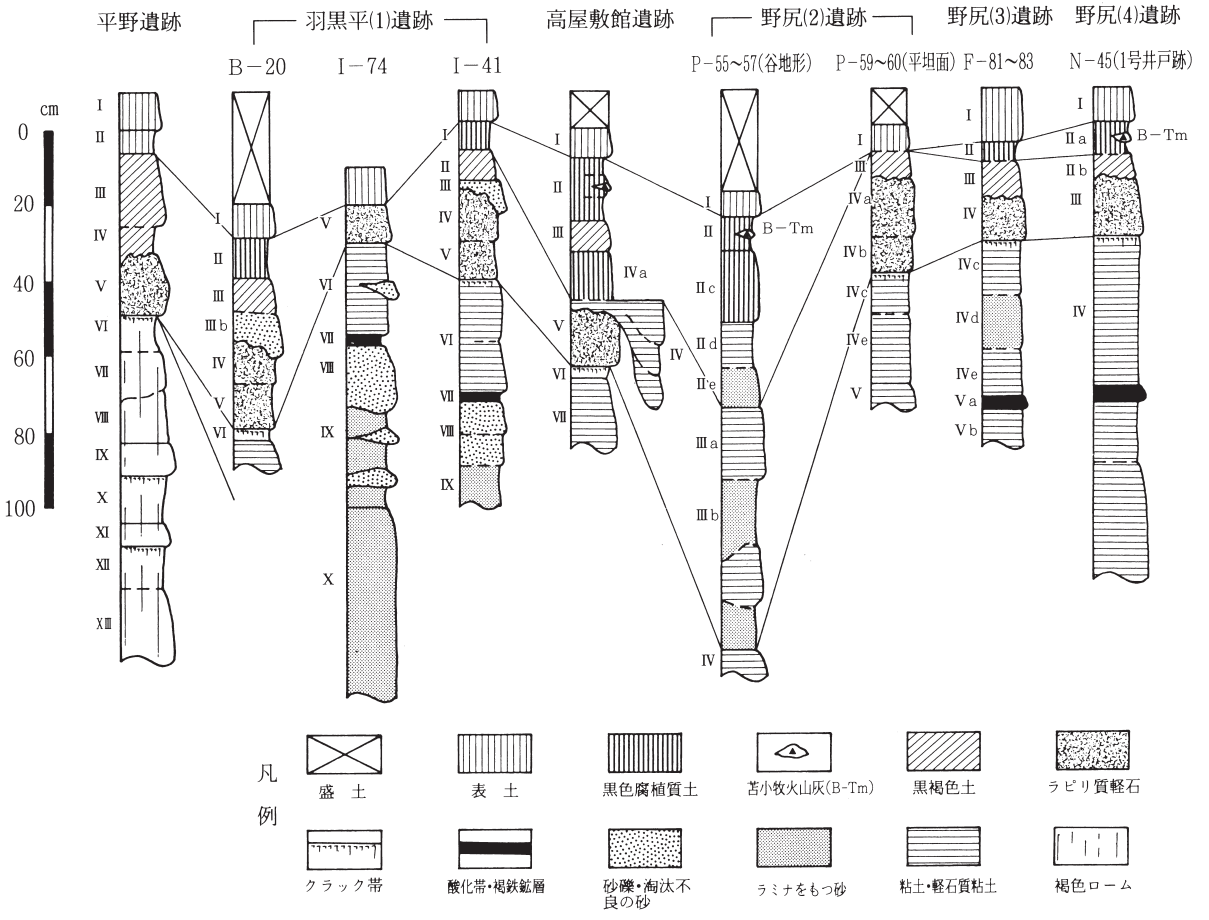
Ⅱｂ層　黒灰色土（厚さ５～10㎝）　漸移層である。粘土ブロックが多量に混入し層全体が粘土質で締まりがある。また、下位の火山灰質粘土の混入も認められる。

Ⅲ　層　黄灰色細粒火山灰質粘土層（厚さ約30㎝）　野尻（２）遺跡での基本層序第Ⅳ層に相当する。上北地方の千曳浮石（東北地方第四紀研究グループ、1969）、大鰐及び碇ヶ関付近の碇ヶ関浮石（山口、1993）に相当する。しかし、本調査区域では一次的な堆積状況を示す分布が少なく、全体的に水成堆積の層相を示す。乾くと、かたく締まった細粒火山灰質粘土で黄灰色を呈する。なお、一次的な堆積状況を示す部分では、明黄褐色を呈するラピリ質の細粒火山灰である。

Ⅳ　層　黄灰色軽石質粘土層（厚さ約70㎝）　風化して粘土質になった軽石粒が多量に混入し、その軽石粒の周囲に酸化による染みが目立つ。Ⅲ層との色調の区別は、Ⅲ層が乾くと明黄灰色に変色するが、本層は常に湿っぽく暗黄褐色に変化する。

Ⅴ　層　黄橙色褐鉄鉱層（厚さ約10㎝）　緻密堅固である。起伏があって大きく波打ち周氷河地帯におけるインボリューションと思われる。なお、本層全体が地形面の傾斜よりも大きく大釈迦川に向かって傾斜する。

Ⅵ　層　暗灰色軽石質粘土層（厚さ約150㎝）　軽石質の砂質粘土で、下部ほど白色を呈する粘土へと層相変化する。ただ、最上部の30㎝程は火山灰質粘土である。



第Ⅲ－１－４図　各遺跡内における土層の模式柱状図

引用参考文献

東北地方第四紀研究グループ　1969　東北地方における第四紀海水準変化　地学団体研究会専報　No15

中川久夫　1972　青森県の地質　第二部（青森県の第四系）　青森県

岩井武彦・澤田庄一郎・大久保貢　1982　土地分類基本調査「青森西部」　青森県

村岡洋文・長谷紘和　1990「黒石地域の地質」地域地質研究報告（５万分の１地質図幅）地質調査所

活断層研究会編　1991　新編日本の活断層　分布図と資料　東京大学出版会

山口義伸　1993　年報ひろさき　No２　弘前市史

第２節　周辺の遺跡（第Ⅲ－２－１図、第１、２表）

1996年３月現在、浪岡町内の遺跡は63箇所が確認されている。時期を平安時代に限定すると、遺跡数は28箇所で、全体の半数以上を占める。これまでに、浪岡町内では比較的数多くの発掘調査が行われてきた。とりわけ、浪岡町教育委員会や青森県教育委員会が実施した東北縦貫自動車道、浪岡バイパス、県道青森－浪岡線建設の３大事業に係る大規模な発掘調査の結果、平安時代の生業や生活内容を解明する上で、数々の貴重な成果を残してきた。

本遺跡は、前田野目台地の標高35～42前後のゆるやかな東斜面に立地している。南東には水田が開け、遠くに八甲田の峰々をのぞみ、北には間近に梵珠山が迫る環境にある。

本遺跡が立地する、梵珠山系の南に連なる前田野目台地には、西側の五所川原市も含めて70箇所余りの平安時代の遺跡が集中して立地している。前田野目台地の東縁即ち大釈迦川の西岸には、北から山本・野尻(1)・本遺跡・野尻(2)・野尻(3)・高屋敷館・山元(1)・山元(2)・山元(3)等の遺跡が立地する。また、台地の西縁や前田野目川沿岸には、五所川原須恵器古窯跡群をはじめとして各遺跡がこれまたひしめきあって立地している。以上のように、前田野目台地周辺は、まさに遺跡の宝庫であり、当時の人々が生活を営む上で適した環境にあったものと思われる。

今回の調査の結果、外周溝、土坑、掘立柱建物跡を伴う竪穴住居跡（本報告書では、これらをセットしてとらえ建物跡と称する。）がまとまった形で検出された。この特殊な形態をとる建物跡群は、浪岡町山本・松元・野尻(2)遺跡、青森市西部の近野・朝日山遺跡等でも検出されている。

更に、調査区域の南端で検出された環濠（集落）は、幅約４ｍ、総長70ｍ、深さ1.2～1.5ｍの規模をもつ。時期は異なるが、１km程南に位置する高屋敷館遺跡との関連等が注目される。

以下に、本遺跡と関連の深いと思われる、浪岡町及び周辺の平安時代の各遺跡について、第Ⅲ－２－1図及び第１・２表にごく簡単にまとめておく。

第１表　周辺の遺跡（平安時代）地名表(1)

浪岡町					No.	県遺跡番号	遺跡名	所在地	備考
No.	県遺跡番号	遺跡名	所在地	備考	11	16	大沼	川倉字大沼袋	☆、◎
					12	17	羽黒平(1)	五本松字羽黒平	☆、◎、◎
1	290－01	早稲田	徳才子字早稲田		13	18	羽黒平(2)	羽黒平	
2	02	大堤沢	長沼字南藤巻		14	21	加茂神社	五本松字松元	
3	03	高屋敷館	高屋敷字野尻	☆(94年度	15	22	沖林	北中野	
4	04	下下平	旭	～95年度)	16	23	浪岡崎(1)	北中野字天王	
5	05	旭(1)	旭字木戸口		17	25	松山寺	羽黒平字野脇	
6	06	旭(2)	旭		18	26	松山	〃	☆、◎、◎
7	09	熊沢溜池	樽沢字村元		19	27	源常平	北中野	☆、◎
8	12	神明宮	銀字杉田		20	36	桃里	北中野字桃里	
9	14	長溜池	松枝字野尻		21	39	杉の沢	北中野字桃里、吉内字杉ノ沢	☆、◎
10	15	大林	銀字杉田		22	40	吉内	吉内字山下	

浪岡町				
No.	県遺跡番号	遺跡名	所在地	備考
23	40	中屋敷	吉内字山下	
24	42	田ノ沢	本郷字篠原	
25	43	本郷	本郷字柳田	
26	44	松元	本郷字松元	☆、◎
27	47	王田館	北中野字桃里	
28	49	山本	徳才子字山本	☆、◎
29	54	山元(1)	杉沢字山元	
30	55	山元(2)	〃	☆、◎
31	56	山元(3)	〃	☆、◎
32	57	平野	五本松字平野	☆、◎
33	58	吉野田平野	吉野田字平野	
34	59	寺屋敷平	吉野田字荷越沢	
35	60	野尻(1)	高屋敷字野尻	
36	61	野尻(2)	〃	☆、◎、◎
37	62	野尻(3)	〃	☆、◎
38	63	野尻(4)	〃	本遺跡

五所川原市				
No.	県遺跡番号	遺跡名	所在地	備考
39	050－01	長者森山館	松野木字花笠	
40	050－02	観音林	松野木字花笠	☆、◎
41	03	原子溜池(1)	原子字山元	☆、◎
42	07	野里	神山字牧原	
43	08	川崎	前田野目字川崎	▲
44	09	桜ケ峰	前田野目字桜ケ峰	☆、◎
45	10	山道溜池	原子字山元	▲
46	11	砂田B・1号窯	前田野目字前田野目山	☆、◎
47	12	砂田B・2号窯	前田野目字前田野目山	
48	13	砂田C	前田野目字砂田	
49	14	砂田D・1号窯	前田野目字砂田	☆、◎
50	15	砂田D・2号窯	前田野目字砂田	☆、◎、▲
51	16	砂田E	前田野目字前田野目山	▲
52	17	鞠ノ沢	前田野目字鞠ノ沢	☆、◎
53	18	持子沢館	持子沢字隠川	
54	19	狼野長根	〃	
55	20	隠川(1)	〃	
56	21	持子沢A	〃	
57	22	持子沢B	〃	☆、◎
58	23	持子沢C	〃	
59	24	持子沢D	〃	☆、◎
60	25	境山	神山字境山	
61	29	金山大溜池	金山字千代鶴	
62	37	飯詰城	飯詰字福泉	
63	39	原子溜池(4)	原子字山元	
64	41	金山館	金山字千代鶴	
65	42	神山館	神山字鶉野	
66	43	真言館	前田野目字桜ケ峰	▲
67	51	犬走(1)	前田野目字犬走	
68	53	田子ノ浦	豊成字田子ノ浦	
69	56	中子	松野木字中子	
70	60	桜ケ峰(3)	前田野目字桜ケ峰	
71	61	犬走(2)	前田野目字犬走	
72	62	隠川(2)	持子沢字隠川	
73	63	隠川(3)	〃	☆（95年度）
74	64	隠川(4)	〃	
75	65	隠川(5)	〃	
76	66	隠川(6)	〃	
77	67	隠川(7)	〃	
78	69	隠川(8)	〃	
79	70	隠川(10)	〃	
80	71	隠川(11)	〃	
81	72	隠川(12)	〃	
82	73	隈無(1)	羽野木沢字隈無	
83	74	隈無(2)	〃	☆（95年度）
84	75	隈無(3)	〃	
85	76	隈無(4)	〃	☆（95年度）
86	050－80	隈無(8)	羽野木沢字隈無	
87	83	松代	俵元字松代	
90	90	実吉	羽野木沢字実吉	☆（95年度）
91	59	桜ケ峰(2)	前田野目字桜ケ峰	☆（95年度）

黒石市				
No.	県遺跡番号	遺跡名	所在地	備考
88	040－02	高館(1)	高館字丁高原	☆、◎

常盤村				
No.	県遺跡番号	遺跡名	所在地	備考
89	310－02	水木館	水木字古館	☆(93・94年度)

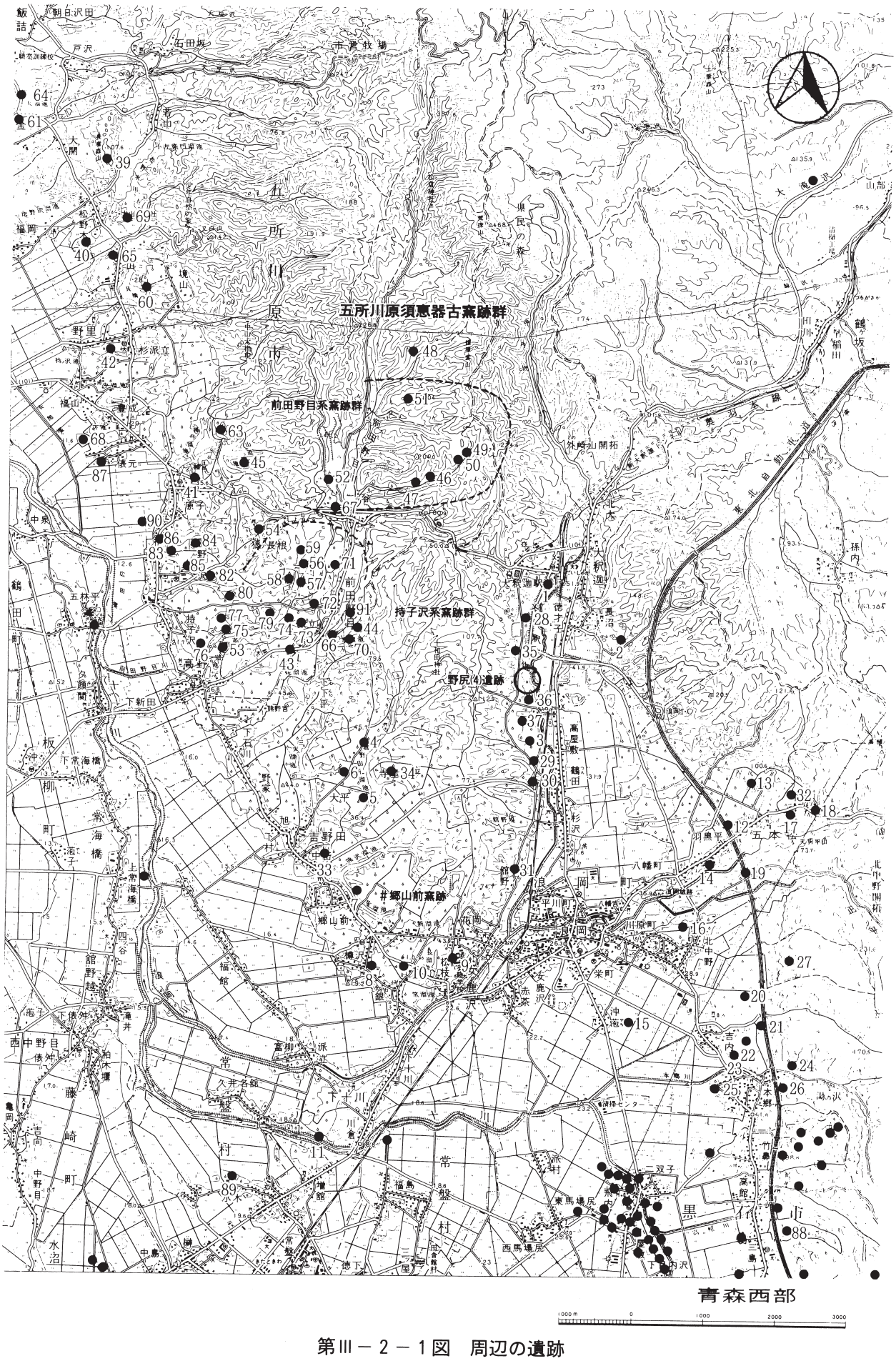
◇注　意◇

備考欄の記号は、次のことを意味する。

☆－発掘調査実施、（　）内は調査年度

◎－報告書刊行

▲－参考文献有り



第Ⅲ－２－１図　周辺の遺跡

No.	編著者名	発行年	題名	書名・巻号
1	奈良岡洋一	1977	浪岡町川倉周辺出土の土師器	『考古風土記』 第2号
2	青森県教育委員会	1978	源常平遺跡発掘調査報告書	青森県埋蔵文化財調査報告書 第 39集
3	〃	1978	高館遺跡発掘調査報告書	青森県埋蔵文化財調査報告書 第 40集
4	〃	1979	羽黒平遺跡発掘調査報告書	青森県埋蔵文化財調査報告書 第 44集
5	〃	1979	杉の沢遺跡発掘調査報告書	青森県埋蔵文化財調査報告書 第 45集
6	〃	1979	松元遺跡発掘調査報告書	青森県埋蔵文化財調査報告書 第 46集
7	浪岡町教育委員会	1980	松山遺跡発掘調査報告書	浪岡町埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 第 1集
8	〃	1981	羽黒平(1)遺跡発掘調査報告書	浪岡町埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 第 2集
9	青森県教育委員会	1987	山本遺跡発掘調査報告書	青森県埋蔵文化財調査報告書 第 105集
10	浪岡町教育委員会	1990	大沼遺跡発掘調査報告書 －平安時代の低湿地遺跡調査－	浪岡町埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 第 4集
11	青森県教育委員会	1994	山元(3)遺跡発掘調査報告書	青森県埋蔵文化財調査報告書 第 159集
12	〃	1995	野尻(2)遺跡発掘調査報告書	青森県埋蔵文化財調査報告書 第 172集
13	〃	1995	松山・羽黒平(1)遺跡発掘調査報告書	青森県埋蔵文化財調査報告書 第 170集
14	〃	1995	山元(2)遺跡発掘調査報告書	青森県埋蔵文化財調査報告書 第 171集
15	〃	1995	水木館遺跡発掘調査報告書	青森県埋蔵文化財調査報告書 第 173集
16	五所川原市教育委員会	1968	津軽・前田野目窯跡	
17	平山 久夫	1969	津軽平野の須恵器（予報）	『北奥古代文化』 第2号
18	坂詰 秀一	1972	津軽・持子沢窯跡の調査	『考古学ジャーナル』 第75号
19	〃	1972	津軽・持子沢窯跡の第2次調査	『 〃 』 第89号
20	〃	1973	津軽持子沢窯跡調査概報	『北奥古代文化』 第5号
21	五所川原市教育委員会	1974	原子遺跡	
22	〃	1974	津軽・前田野目窯跡	
23	村越 潔・新谷 武	1974	青森県前田野目砂田遺跡遺跡発掘調査概報	『北奥古代文化』 第6号
24	坂詰 秀一	1974	津軽持子沢窯跡第2次調査概報	『 〃 』 第6号
25	新谷 武	1974	青森県前田野目砂田遺跡遺跡出土の箆書土器について	『 〃 』第7号
26	坂詰 秀一	1974	津軽前田野目窯跡群をめぐる課題	『 〃 』 第7号
27	五所川原市教育委員会	1975	観音林遺跡（第一次）	
28	新谷 雄蔵	1976	観音林遺跡の調査研究	『考古風土記』 第1号
29	新谷 武	1981	五所川原市周辺の須恵器窯跡出土の長頸壺について	『弘前大考古学研究』 第1号
30	五所川原市教育委員会	1984 ～91	観音林遺跡（第二～九次）	
31	桑原 滋郎	1986	津軽で焼かれた須恵器――前田野目窯跡	図説発掘が語る日本史 新人物往来社
32	青森県教育委員会	1990	図説 ふるさと青森の歴史 総括編	
33	三浦 圭介	1990	日本海北部における古代後半から中世にかけての土器様相	『土器からみた中世社会の成立』
34	三浦 圭介	1991	古代における東北北部の生業 『北からの視点』	日本考古学協会宮城・仙台大会 シンポジウム
35	三浦圭介・岡田博康	1992	津軽五所川原古窯群について 『東日本における古代・中世窯業の諸問題』	大戸窯検討のための「会津シンポジウム」
36	三浦 圭介	1993	青森県における古代の土器様相 『北日本における律令期の土器様相』	第18回古代城柵官衙遺跡検討会
37	三浦 圭介	1994	「第3章 古代」 『弘前市史』	
38	北林 八洲晴	1983	「古代（奈良・平安）」『青森県の考古学』	青森大学出版局
39	黒石市教育委員会	1995	豊岡(2)遺跡	黒石市埋蔵文化財調査報告書 第 13集
40	畠山昇・大田原慶子	1996	平安時代の大規模な環濠集落 ―青森県高屋敷館遺跡	季刊考古学第54号
41	三浦 圭介	1995	青森県における古代末期の防御性集落	考古学ジャーナル 4月号
42	工藤 清泰	1994	古代末・中世初期の北奥羽 ―考古学資料からの考察―	歴史評論 11月号
43	三浦 圭介	1995	北奥・北海道地域における古代防御性集落の発生と展開『青森県十三湊遺跡・福島城の研究』	国立歴史民俗博物館研究報告 第 64集

第Ⅳ章　縄文時代の遺構と遺物

縄文時代の遺構と遺物は、平安時代のそれと比較して、数量的に極めて少ない。居住区を構成する竪穴住居跡などの遺構は一切検出されず、狩猟活動に関連づけて考えられている溝状ピットが４基と、用途不明の土坑が１基検出されたのみである。溝状ピットから縄文土器などの遺物は全く出土していない。

遺構外の土器は、全て破片で、出土状態はプライマリーなものではない。１個体のみ口縁部の約２分の１が復元されたものの、他は全て接合率の低い破片資料である。器表面の摩滅の状態より察して、本遺跡の周辺から移動してきたものも多いのではないかと推察される。総量は33cm×25cm×５cmのデスクトレイ１つに納まる程度である。

石器は、定形石器が６点、不定形石器が２点の合計８点が出土した。ほかに石製品１点と調整や使用痕の認められない剥片（図示していない）が数点出土した。なお、磨石や石皿等の調理具類は出土していない。

以下、縄文時代の遺構・遺物について記載する。

＊縄文土器・石器は、平安時代の遺構から出土したものも遺構外出土遺物として本章において記載する。

＊遺物の出土しなかった遺構の中にも縄文時代の遺構が含まれている可能性はあるが、ここでは確実に縄文時代として認定できた遺構のみを報告する。

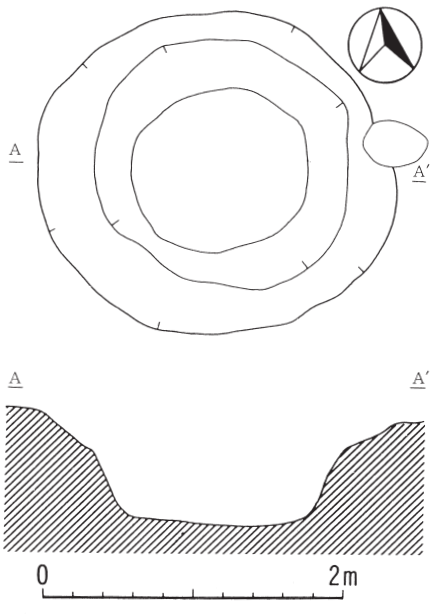
第１節　遺　構

５基検出した。土坑１基と溝状ピット４基である。非常に散発的な位置関係を示し、限定された範囲内にまとまるような傾向は伺えない（付図参照）。以下、土坑、溝状ピットの順に検出した５基について述べる。

１　土　坑

第200号土坑

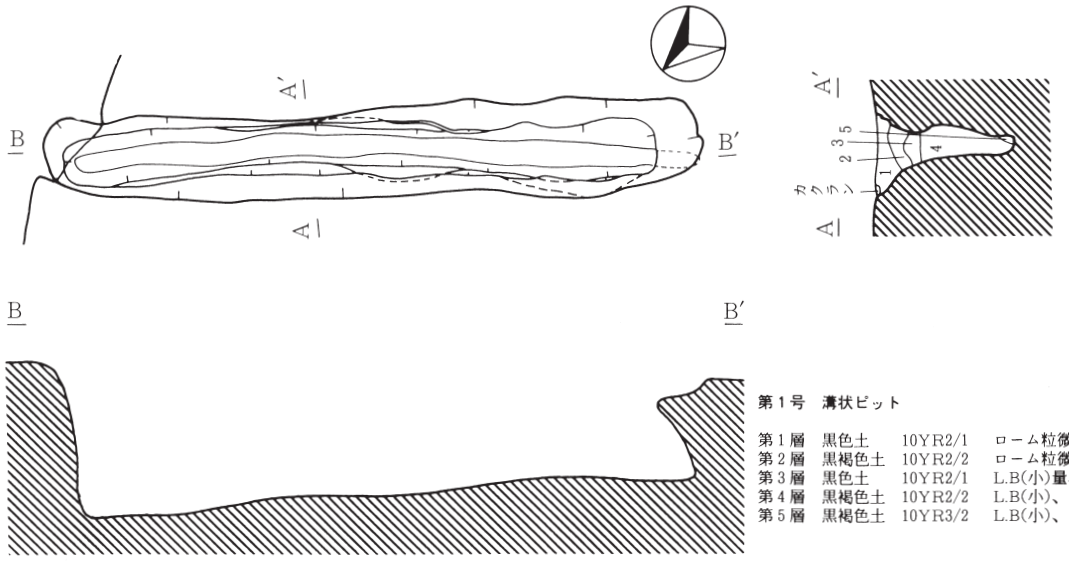
位　置	E−80,E−79		図 版	第Ⅳ−1−1図	写 真	4−5
重　複	西側上端で平安時代の柱穴と重複する。本遺構が古い。					
平面形	楕円形					
規　模	上 端	238cm ×211cm	下 端	118cm ×107cm	深 さ	73cm
壁	緩やかに立ち上がる上位と下位間に段差あり				底 面	ほぼ平坦
堆積土	湧水があまりに著しいため、セクション図は作成しなかった。 断面観察では、上層に混入物のほとんどない黒色土。下層にはローム混合土が層状に堆積していた。全て自然堆積と考えられる。					
出土遺物	堆積土中から縄文土器片が12点出土した(第Ⅳ−2−2図15〜19, 第Ⅳ−2−3図１〜３)。					
備　考	縄文土器のみが出土した遺構は本遺構だけである。 平安時代の土坑と比較し、非常に黒色の強い土壌である。					



第Ⅳ−１−１図　第200号土坑

第１号　溝状ピット

位　置	I-105	図版	第Ⅳ－１－２図	写真	４－６
重　複	第13号溝と重複する。本遺構が古い。				
平面形	溝状				
規　模	上端　348cm×52cm	下端	330cm×14cm	深さ	73cm
壁	垂直、フラスコ状に立ち上がる			底面	ほぼ平坦
堆積土	５層に分層　主体：黒褐色土　混入物：ローム粒子・ロームブロック　全て自然堆積と考えられる。				
出土遺物	なし。				
備　考					

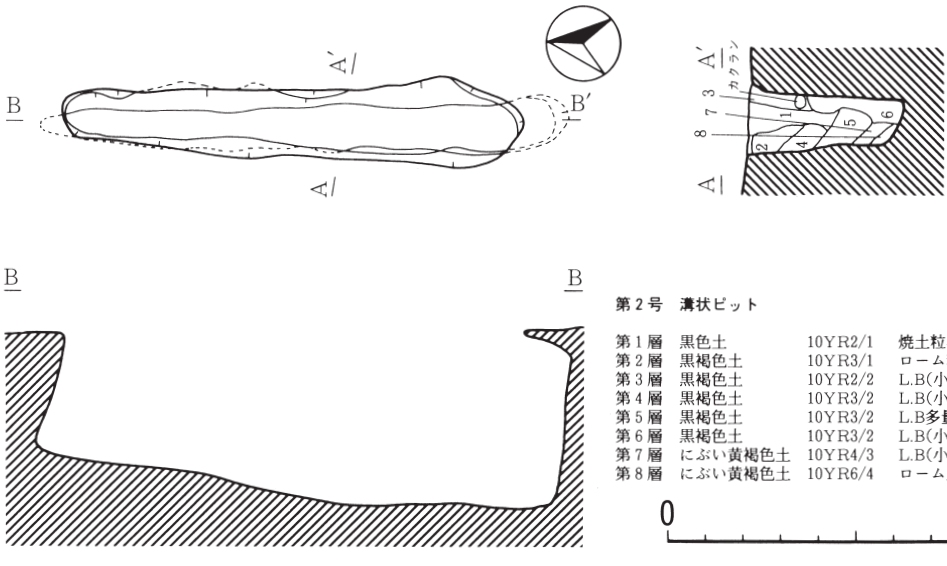


第１号　溝状ピット

第１層　黒色土　10YR2/1　ローム粒微量。
第２層　黒褐色土　10YR2/2　ローム粒微量。
第３層　黒色土　10YR2/1　L.B(小)量、ローム粒微量。
第４層　黒褐色土　10YR2/2　L.B(小)、ローム粒少量。
第５層　黒褐色土　10YR3/2　L.B(小)、ローム粒中量。

第２号　溝状ピット

位　置	K-65	図版	第Ⅳ－１－２図	写真	４－７
重　複	第37号溝と重複する。本遺構が古い。				
平面形	溝状				
規　模	上端　244cm×48cm	下端	272cm×24cm	深さ	82cm
壁	垂直、フラスコ状に立ち上がる			底面	ほぼ平坦
堆積土	８層に分層　主体：黒褐色土　混入物：ローム粒子・ロームブロック　自然堆積か人為堆積か不明。				
出土遺物	なし。				
備　考					



第２号　溝状ピット

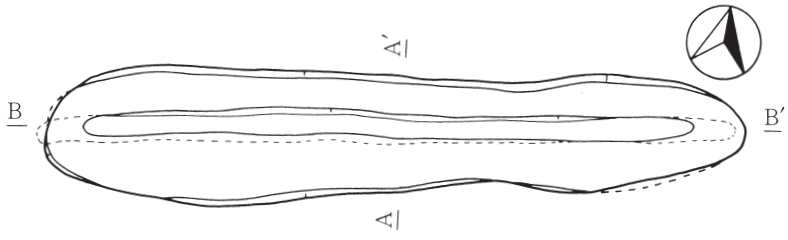
第１層　黒色土　10YR2/1　焼土粒、ローム粒微量。
第２層　黒褐色土　10YR3/1　ローム粒微量。
第３層　黒褐色土　10YR2/2　L.B(小)少量。
第４層　黒褐色土　10YR3/2　L.B(小)、ローム粒少量。
第５層　黒褐色土　10YR3/2　L.B多量、粘土微量。
第６層　黒褐色土　10YR3/2　L.B(小)微量。
第７層　にぶい黄褐色土　10YR4/3　L.B(小)中量。
第８層　にぶい黄褐色土　10YR6/4　ローム層。

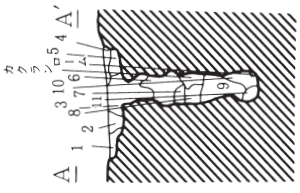
0　2m

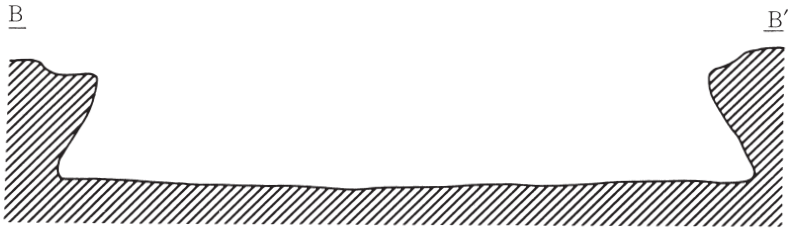
第Ⅳ－１－２図　溝状ピット（１）

第3号　溝状ピット

位　置	J-7 、K-7	図版	第Ⅳ－１－３図		写真	4－8	
重　複	なし。						
平面形	溝状						
規　模	上端	382cm×72cm	下端	340cm×44cm		深さ	80cm
壁	長軸：フラスコ状、短軸：T字状に立つ上がる				底面	ほぼ平坦	
堆積土	10層に分層、主体：褐色土　混入物：ローム粒子、ロームブロック、炭化物粒　自然堆積と考えられる。						
出土遺物	なし。						
備　考							







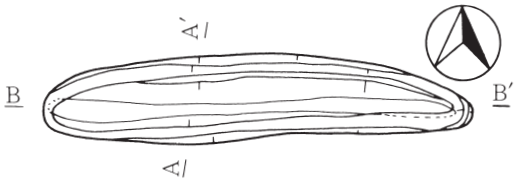
第3号　溝跡ピット南東－北西セクション

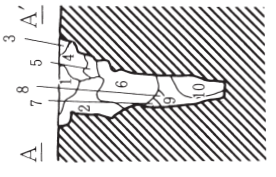
第１層　黒褐色土　10YR2/3　L.B(小)、ローム粒少量。
第２層　黒褐色土　10YR3/3　L.B(小)少量、炭化粒微量。

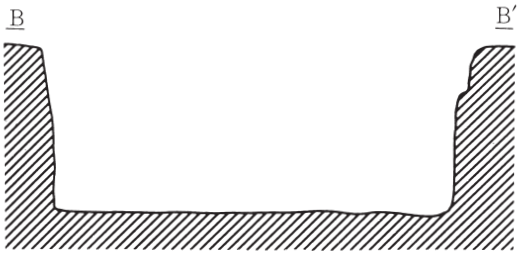
第３層　黒褐色土　10YR2/3　L.B(小)、ローム粒少量。
第４層　黒褐色土　10YR3/3　L.B(小)微量。
第５層　にぶい黄褐色土　10YR4/3　L.B(小)、ローム粒中量。
第６層　黒褐色土　10YR2/2　L.B(大)、ローム粒少量。
第７層　明黄褐色土　10YR6/6　ローム粒多量。
第８層　黒褐色土　10YR2/2　L.B(小)、ローム粒少量、炭化微量。
第９層　黒褐色土　10YR2/3　炭化粒微量。
第10層　にぶい黄褐色土　10YR4/3　L.B(小)少量、炭化物(小)微量。
第11層　褐色土　10YR4/6
第12層　褐色土　10YR4/4　L.B(小)、ローム粒中量。
第13層　褐色土　10YR4/6　ローム層。

第4号　溝状ピット

位　置	J-22、K-22	図版	第Ⅳ－１－３図		写真	－	
重　複	第104号溝と重複する。本遺構が古い。						
平面形	溝状						
規　模	上端	228cm×40cm	下端	216cm×24cm		深さ	88cm
壁	ほぼ垂直に立ち上がる。				底面	ほぼ平坦	
堆積土	10層に分層　主体：黒褐色土　混入物：ローム粒子　ロームブロック、炭化物粒　自然堆積か人為堆積か不明。						
出土遺物	なし。						
備　考							







第4号　溝跡ピット南北セクション

第１層　黒褐色土　10YR2/2　ローム粒、炭化物微量。
第２層　黒褐色土　10YR2/3　L.B(大)中量、炭化物微量。
第３層　黒褐色土　10YR5/6　ローム層。
第４層　黒褐色土　10YR2/3　L.B(小)少量、炭化粒微量。
第５層　にぶい黄褐色土　10YR4/3　L.B(小)、ローム粒少量。
第６層　暗褐色土　10YR4/3　L.B(大)(小)、ローム粒多量、炭化物少量。
第７層　褐色土　10YR4/4　L.B(小)、ローム粒少量。
第８層　黒褐色土　10YR3/2　L.B、ローム粒少量。
第９層　褐色土　10YR4/4　L.B、ローム粒多量、炭化物微量。
第10層　黒褐色土　10YR3/2　L.B(小)、ローム粒多量、炭化物微量。

0　2m

第Ⅳ－１－３図　溝状ピット（２）

第２節　遺　物

（１）　土器（第Ⅳ－２－１～３図）

表土層と第Ⅱ層及び下記の遺構内から出土した。全て破片である。

縄文土器出土遺構一覧表

遺　　構	層位	破片数	備　考	遺　　構	層位	破片数	備　考
第30号竪穴住居跡	覆土	2	平安時代	第120号溝	覆土	2	平安時代
第74号土坑	覆土	18	平安時代	第120号溝	底面	1	平安時代
第79号土坑	覆土	2	平安時代	第129号溝	覆土	8	平安時代
第200号土坑	覆土	11	縄文時代	第137号溝	覆土	1	平安時代
第10号溝	１層	1	平安時代	第140号溝	Ⅱ層	1	N－17
第41号溝	覆土	1	平安時代				

破片は57点出土した。遺構外の遺物は23ラインから南域に分布する傾向が認められる。

表面の摩滅が著しいものも多く、また破片のため型式名の特定は困難である。よって出土土器の分類は、下記のように概区分した。

第Ⅰ群土器：縄文前期後葉の土器

第Ⅱ群土器：縄文後期前葉の土器

　第１類　磨消縄文

　第２類　沈線文主体の土器で、平行沈線、Ｓ字状沈線

第Ⅲ群土器：縄文後期中葉の土器

　第１類　磨消縄文

　第２類　縄文のみ

第Ⅳ群土器：縄文後期の土器と思われるが、明確に時期を特定できないもの

第Ⅴ群土器：縄文晩期前葉の土器

第Ⅰ群土器：縄文前期後葉の土器（第Ⅳ－２－１図１～２）

１，２ともに繊維を混入し、大変磨滅が著しい。胴部であるため、型式名の特定は困難であるが、概ね２点とも円筒下層式土器の範疇に収まるものと思われる。２は、単軸絡条体Ｌ縄文が施される

第Ⅱ群土器：縄文後期前葉の土器（第Ⅳ－２－１図３～16）

３～７（第１類）は沖附（２）式に平行する可能性が高いと思われ、８～16（第２類）は平行沈線文、Ｓ字状沈線文が施文されており、十腰内Ⅰ式に比定されると思われる。

第Ⅲ群土器：縄文後期中葉の土器（第Ⅳ－２－１図17，18～第Ⅳ－２－２図１～５）

第Ⅳ－２－１図17，18～第Ⅳ－２－２図１（第１類）は、底径が小さく、胴部中央で大きく広がり、口縁部がさらに大きく広がる器形と思われる。第Ⅳ－２－２図５（第２類）は、口縁部下６cmまでし

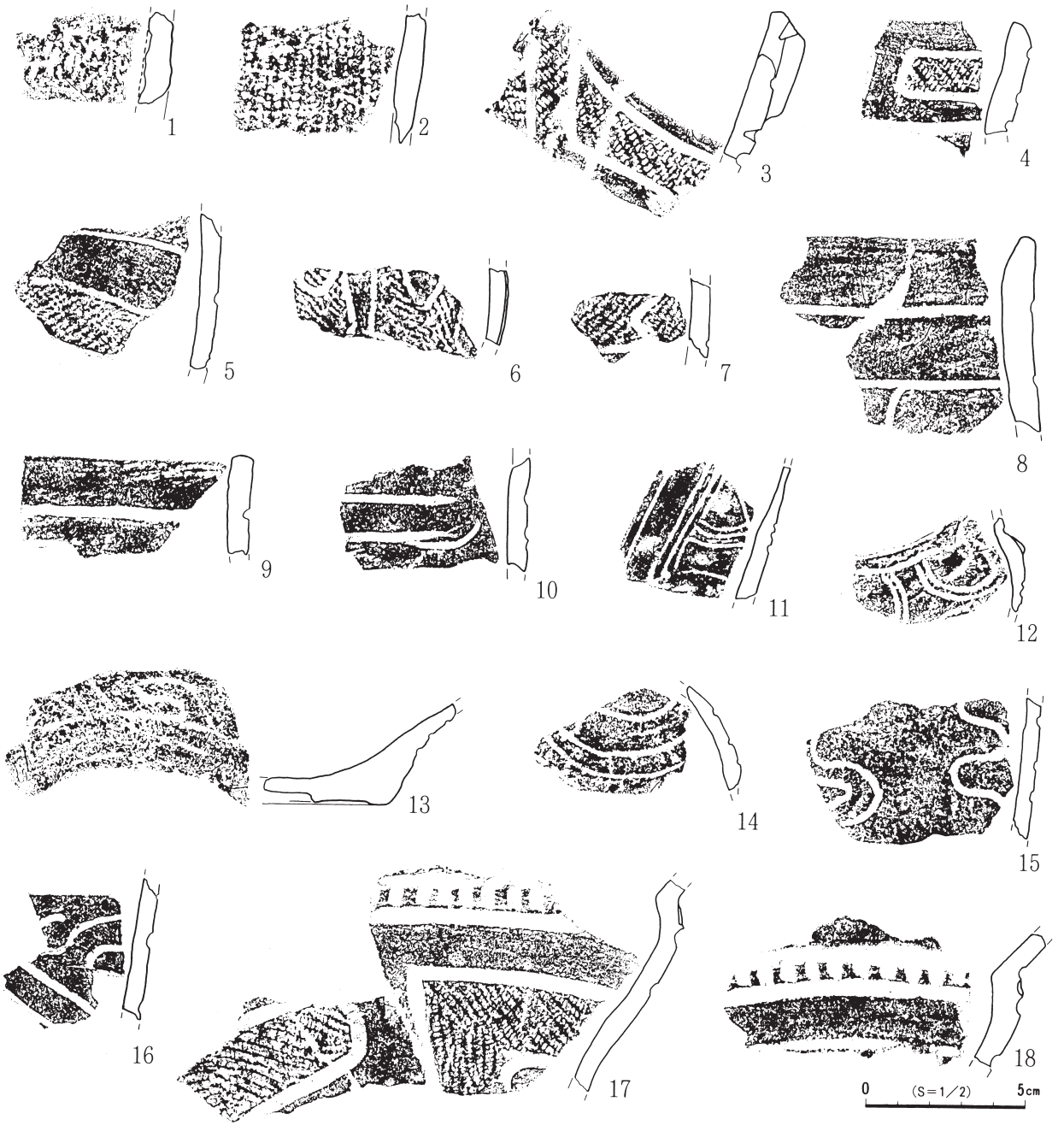
か器形を復元できない。口唇部は肥厚し、入念なミガキが施される。第１類、第２類ともにほぼ十腰内Ⅲ式土器に平行すると思われる。

第Ⅳ群土器：縄文後期の土器と思われるが、時期を特定できないもの（第Ⅳ－２－２図６，７）

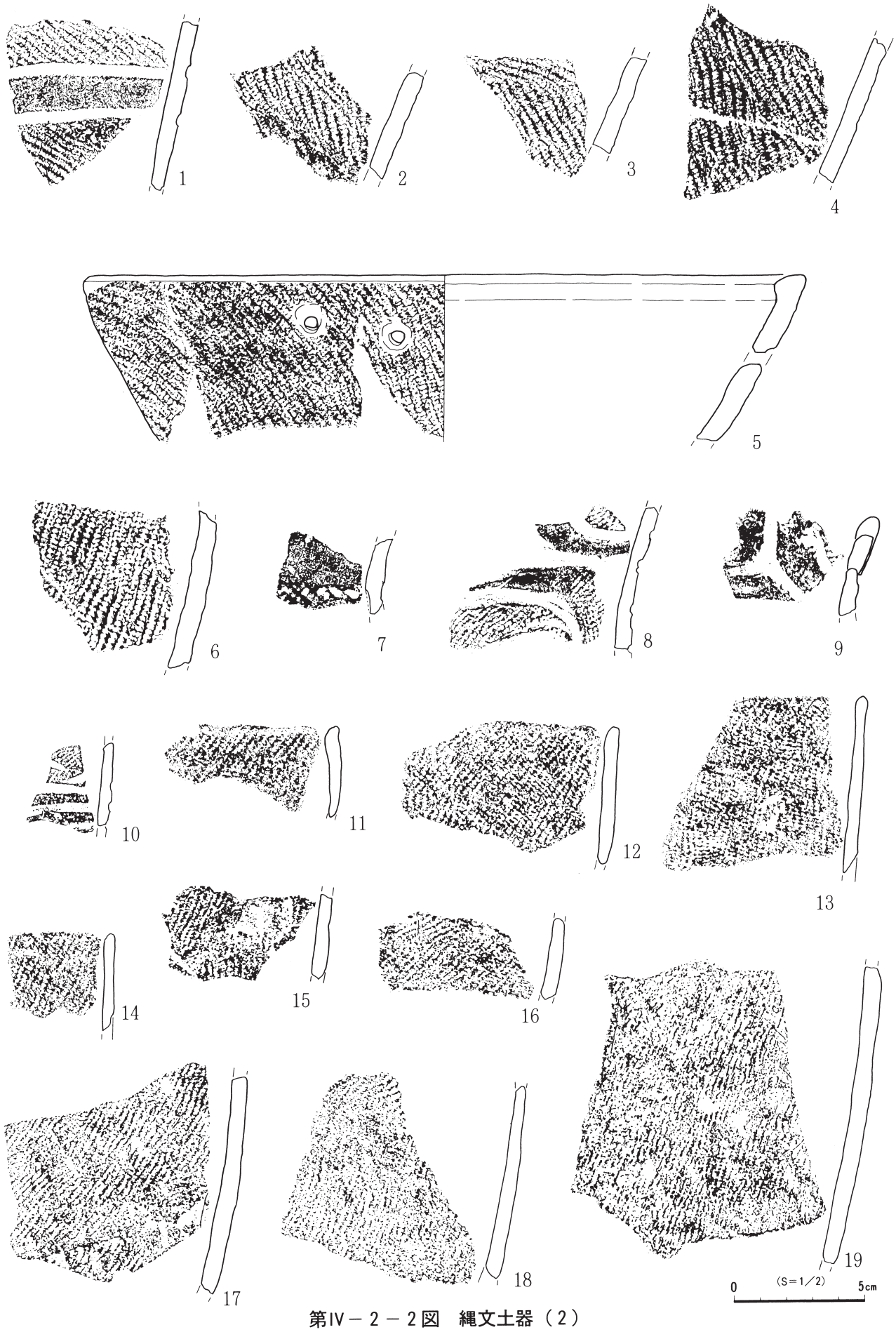
６は、小礫を多量に含み、内面には荒くケズリを施す深鉢の胴部破片で、他の縄文土器とは全く状態の異なるものである。７は、淡橙色に焼成されるもので、縄文施文後に折り返し部を貼付している。

第Ⅴ群土器：縄文晩期の土器（第Ⅳ－２－２図８～19，第Ⅳ－２－３図１～３）

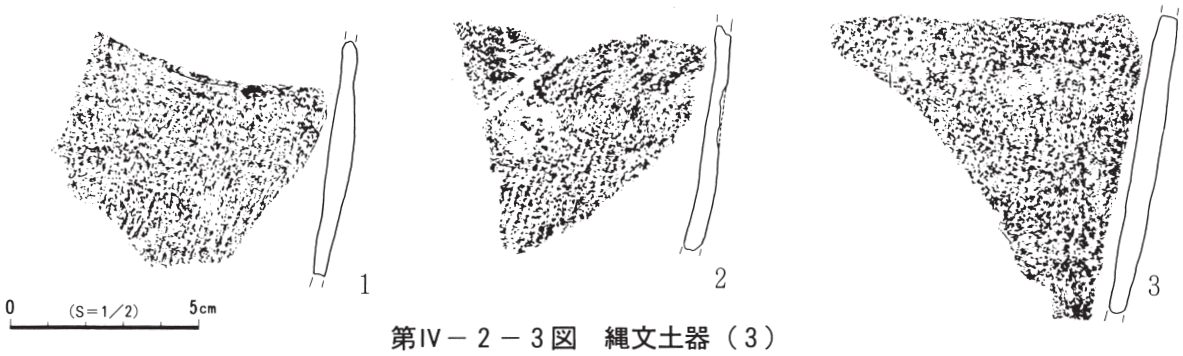
８と９は同一個体と思われ、９はＢ状突起中央部より垂下する沈線が三叉文につながる文様構成と思われる。８は、磨消縄文が観察される口縁部直下。10は、白色に焼成されるもので、縄文の節が非常に細かい。８～10は大洞Ｂ式の鉢（台付鉢?）と思われる。11～３は、大洞Ｂ～BC式くらいに比定される粗製の深鉢と思われる。焼成は非常に軟質である。



第Ⅳ－２－１図　縄文土器（１）



第Ⅳ－２－２図　縄文土器（２）



第Ⅳ－２－３図　縄文土器（３）

縄　文　土　器　観　察　表

図	番	出土地点	層位	分類	器種	部位	地文	沈線幅mm	胎土混入物	海面骨針	炭化物	焼成	その他特徴	整理No.
Ⅳ-2-1	1	H-17	第Ⅰ層	Ⅰ	深鉢	胴	不明	－	細砂粒全体	○	－	良	円筒下層式、繊維混入、磨滅著しい	32
	2	第141号溝	覆土	Ⅰ	深鉢	胴	絡条体RL	－	細砂粒微量	○	－	良	繊維混入、絡条体（L）円下、摩滅著しい	10
	3	E-16	第Ⅰ、Ⅱ層	Ⅱ-1	深鉢	口縁	RL	3.5	細砂粒全体	○	－	良	口唇と内面ミガキ　突起頂部とその下位の縦位隆帯上に２個の円形刺突	28
	4	E-16	第Ⅰ、Ⅱ層	Ⅱ-1	深鉢	口縁	RL	3.5	細砂粒全体	○	－	良	口唇と内面ミガキ　第11図-3と同一個体か	29
	5	K-19	第Ⅰ層	Ⅱ-1	深鉢	胴	LR	1.5	細砂粒全体	○	－	良	磨滅　無文部ミガキ	41
	6	第79号土坑	覆土	Ⅱ-1	深鉢	胴	不明	1.5～2	細砂粒全体	－	－	良		2
	7	第79号土坑	覆土	Ⅱ-1	深鉢	胴	不明	2.5	細砂粒全体	○	－	良		1
	8	O-1	第Ⅰ層	Ⅱ-2	深鉢	口縁	－	3	砂粒全体	－	－	良	内外面磨き	47
	9	N-2	第Ⅰ層	Ⅱ-2	深鉢	口縁	－	3.5	細砂粒全体	○	－	良	内外面磨き　第11図-8と同一個体か	43
	10	N-2	第Ⅰ層	Ⅱ-2	深鉢	口縁近く	－	2.5	砂粒全体	○	－	良	磨滅　内外磨き	44
	11	第140号溝（N-17）	覆土	Ⅱ-2	深鉢	胴	－	1.5	細砂粒全体	○	－	良	器厚非常に薄い	3
	12	K-5	第Ⅰ層	Ⅱ-2	壷？	胴	－	2	砂粒全体	－？	－	良	磨滅著しい　長方形の貼瘤	36
	13	G-90	第Ⅰ層	Ⅱ-2	鉢	底部	－	1.5	砂粒全体	？	－	良	磨滅著しい	38
	14	G-90	第Ⅰ層	Ⅱ-2	鉢	胴	－	1.5	砂粒全体	？	－	軟	磨滅著しい	40
	15	L-12	第Ⅰ層	Ⅱ-2	深鉢	胴	－	2.5	細砂粒全体	○	－	良	内外面磨き	35
	16	N-2	第Ⅰ層	Ⅱ-2	深鉢	胴	－	2.5	細砂粒全体	○	－	良	内外面磨き	46
	17	第120号溝（Ⅰ－9）	覆土 底面 第Ⅰ層	Ⅲ-1	深鉢	胴	磨消RL	5	砂粒全体	○	－	良	２条平行横位沈線間に縦位列点（沈線と同一工具）十腰内Ⅱ～Ⅲ式か	8
	18	第120号溝	覆土	Ⅲ-1	深鉢	胴	－	5	砂粒全体	○	－	良	第11図-17　と同一個体	9
Ⅳ-2-2	1	第137溝	覆土	Ⅲ-1	深鉢	胴	磨消RL	4～5	砂粒全体	○	－	良		4
	2	第74号土坑	覆土	Ⅲ-2	深鉢	胴	RL	－	細砂粒全体	－	－	良	一部内面黒斑　一部磨滅、第11図-17、18と同一個体か	20
	3	第129号溝	覆土	Ⅲ-2	深鉢	胴	RL	－	細砂粒全体	－	－	良	一部内面黒斑　一部磨滅、第11図-17、18と同一個体か	12
	4	第74号土坑	覆土	Ⅲ-2	深鉢	胴	RL	－	細砂粒全体	－	－	良	一部内面黒斑　一部磨滅、第11図-17、18と同一個体か	21
	5	第74号土坑第129号溝	覆土	Ⅲ-2	深鉢	口縁	RL	－	細砂粒全体	－	－	良	口唇部肥厚・入念な面取り・ミガキ　焼成後穿孔（補修孔）２個有り	
	6	G-18	第Ⅰ層	Ⅳ	深鉢	胴	RL	－	砂粒～小礫多量	○	－	良	内面ケズリ	33
	7	E-16	第Ⅰ、Ⅱ層	Ⅳ	深鉢	口縁近く	RL	－	砂粒全体	－	－	良	折り返し口縁	30
	8	O-33	第Ⅰ層	Ⅴ	鉢	口縁近く	不明	5	砂粒全体	－	○	良	大洞Ｂ式、内面ケズリ	34
	9	O-33	第Ⅰ層	Ⅴ	深鉢	口縁	－	5	砂粒全体	－	○	良	大洞Ｂ式か	31
	10	O-22、23	第Ⅰ層	Ⅴ	鉢？	口縁近く？	LR	3.5	細砂粒全体	－	－	軟	大洞Ｂ式か	42
	11	F-81	第Ⅰ層	Ⅴ	深鉢	口縁	LR	－	砂粒全体	－	－	軟	磨滅非常に著しい　第12図-11　～14は同一個体か	53
	12	F-81	第Ⅰ層	Ⅴ	深鉢	口縁	LR	－	砂粒全体	－	－	軟	磨滅非常に著しい　第12図-11　～14は同一個体か	51
	13	F-81	第Ⅰ層	Ⅴ	深鉢	口縁	LR	－	砂粒全体	－	－	軟	磨滅非常に著しい　第12図-11　～14は同一個体か	56
	14	F-81	第Ⅰ層	Ⅴ	深鉢	口縁	LR	－	砂粒全体	－	－	軟	磨滅非常に著しい　第12図-11　～14は同一個体か	55
	15	第200号土坑	覆土	Ⅴ	深鉢	胴	LR	－	砂粒全体	－	－	軟	磨滅非常に著しい、第12図-15　～19　第13図１～３は同一個体か	2
	16	第200号土坑	覆土	Ⅴ	深鉢	胴	LR	－	砂粒全体	－	－	軟	磨滅非常に著しい、第12図-15　～19　第13図１～３は同一個体か	8
	17	第200号土坑	覆土	Ⅴ	深鉢	胴	LR	－	砂粒全体	－	－	軟	磨滅非常に著しい、第12図-15　～19　第13図１～３は同一個体か	7
	18	第200号土坑	覆土	Ⅴ	深鉢	胴	LR	－	砂粒全体	－	－	軟	磨滅非常に著しい、第12図-15　～19　第13図１～３は同一個体か	5
	19	第200号土坑	覆土	Ⅴ	深鉢	胴	LR	－	砂粒全体	－	－	軟	磨滅非常に著しい、第12図-15　～19　第13図１～３は同一個体か	6
Ⅳ-2-3	1	第200号土坑	覆土	Ⅴ	深鉢	胴	LR	－	砂粒全体	－	－	軟	磨滅非常に著しい、第12図-15　～19　第13図１～３は同一個体か	3
	2	第200号土坑	覆土	Ⅴ	深鉢	胴	LR	－	砂粒全体	－	－	軟	磨滅非常に著しい、第12図-15　～19　第13図１～３は同一個体か	1
	3	第200号土坑	覆土	Ⅴ	深鉢	胴	LR	－	砂粒全体	－	－	軟	磨滅非常に著しい、第12図-15　～19　第13図１～３は同一個体か	4

（２）　石器（第Ⅳ－２－４図１～８）

８点出土した。出土石器の分類は、下記のように概区分した。

第Ⅰ群石器：石　鏃　　第１類：有茎　第２類：柳葉型　第３類：アメリカ式

第Ⅱ群石器：スクレイパー　　第１類：刃部断面角が大きいもの

第２類：刃部がかなり粗雑に調整され、刃こぼれの見られるもの

第Ⅲ群石器：磨製石斧　　類別なし

第Ⅳ群石器：磨　器　　第１類：扁平な礫の一側縁を磨っているもの

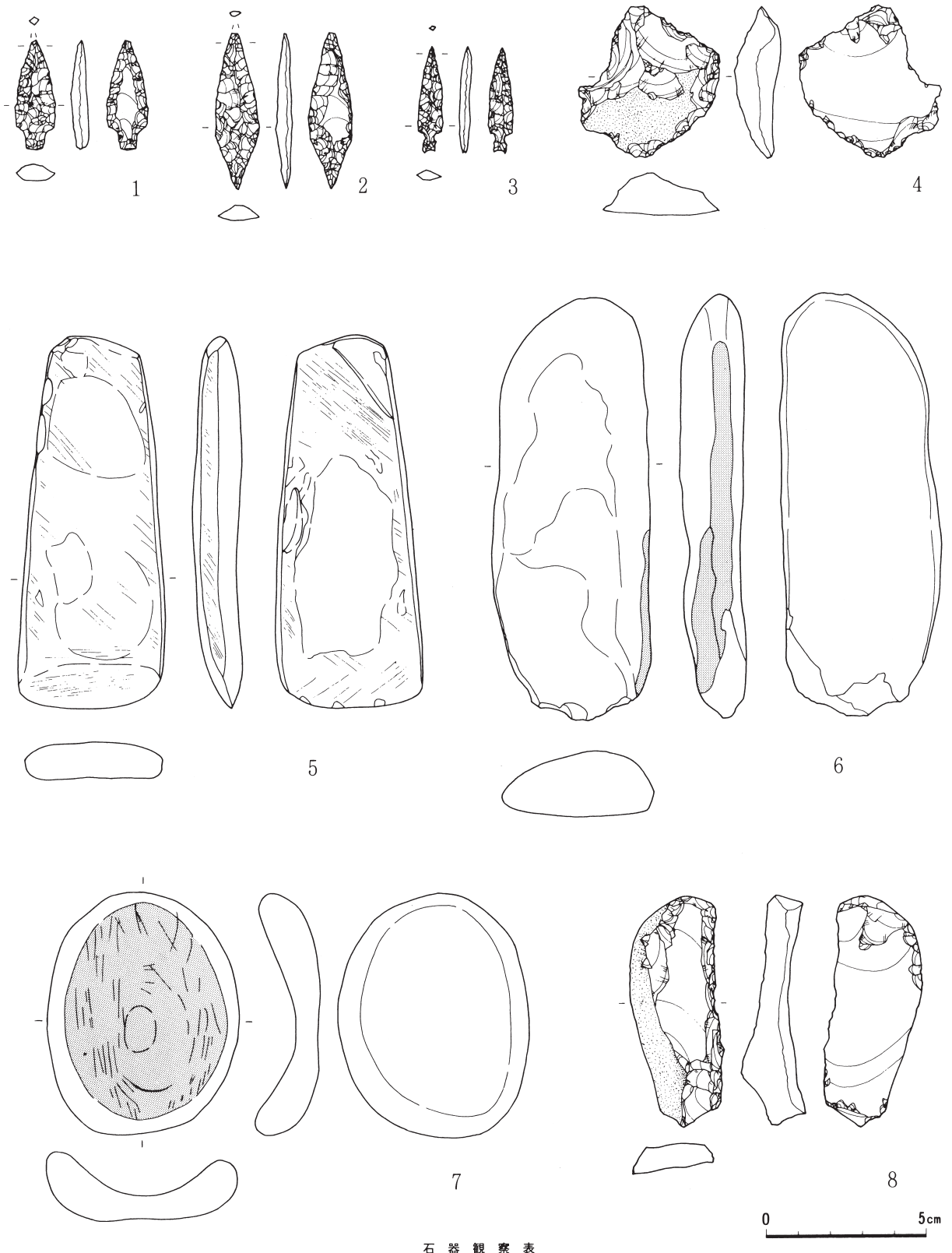
第２類：形状は石皿であるが、非常に小型のもの

第Ⅰ群石器：石鏃（１～３）　３点出土した。１は有茎、２は柳葉型で、両者とも先端部を欠失する。３はアメリカ式であるが、弥生土器が全く出土していないことから本資料は縄文時代の遺物に含めた。

第Ⅱ群石器：スクレイパー（４，８）　２点出土した。８は断面が直角に近い掻器状の刃部を有し、４は刃部がかなり粗雑に調整され、刃こぼれが見られる。

第Ⅲ群石器：磨製石斧（５）１点出土した。擦り切り技法で製作されており、刃部は片刃である。

第Ⅳ群石器：磨石類（６，７）６は扁平な礫の一側縁を磨っているもので、手に良くフィットする。７の形状は石皿状であるものの非常に小型であり、日常的な実用品とは考え難いものである。



石　器　観　察　表

No.	出土地点	層位	分類	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	石　材	特　　徴	欠損	整理No.
1	G-49	Ⅰ	Ⅰa	33.5	12.5	6.0	2.0	珪質頁岩		有	4-15
2	F-80	Ⅰ	Ⅰb	48.0	13.5	5.5	1.9	珪質頁岩		有	4-14
3	M-15	Ⅰ	Ⅰc	33.0	7.5	3.0	0.4	珪質頁岩		有	4-13
4	F-23	Ⅰ	Ⅱb	47.0	44.0	14.0	19.0	珪質頁岩	礫表皮残存・刃部粗雑・バルヴァースカー有	－	4-17
5	第34号溝(N-77N)	覆土	Ⅲ	114.0	45.0	15.0	110.0	緑色細粒疑灰岩	礫表皮残存・擦切技法・片刃	無	4-18
6	O-25	Ⅰ	Ⅳa	130.0	50.0	20.0	125.9	細粒疑灰岩			4-11
7	J-20	Ⅰ	Ⅳb	75.0	60.0	20.0	53.0	細粒疑灰岩			4-9
8	F-5	Ⅰ	Ⅱa	71.0	30.0	20.5	27.3	珪質頁岩	掻器的刃部・礫表皮残存	無	4-16

第Ⅳ－２－４図　縄文時代の石器